

バードリサーチ ニュース

2011年8月号 Vol.8 No.8



Phalacrocorax carbo
Photo by Watanabe Yoshiro

活動計画

鳴き声検索システム開発します！

植田睦之

鳥を覚えようと思ったとき、一番難しいのが声の識別です。見ることができれば、図鑑で調べることができますが、図鑑に記載されている「ピピピ チュイチュイ チョチヨ チリリ」といような声を組み合わせさせて鳴く」では自分の聞いた声との対応がつきません。ちなみにこの「ピピピ・・・」は何の鳥の声だと思いますか？鳥に詳しい皆さんでもわからないですよ。答えはミンサザイです。

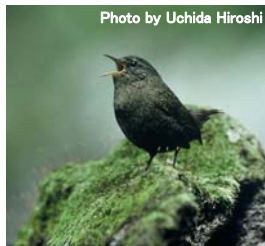


写真: さえずるミンサザイ。

バードリサーチでも「鳴き声図鑑」を公開しています。巷でもいろいろな鳴き声のCDなども販売されています。これと聞き比べれば、図鑑のカタカナ記載よりもずっとよくわかります。ただ、聞き比べることができるのは、「たぶんノジコだと思っただけどうだろうか？」とか、ある程度自分で種を絞り込むことのできる人だけです。そうでない人はどの鳥の声を聞けばよいのか途方に迷ってしまいます。

そこで、鳥に興味のある人が、鳥の声を覚えられるツールをつかって、未来のバードリサーチを増やそうと、鳴き声の検索システムを電気通信大学の笠井研究室と共同でまずはiPhone版を開発することになりました。

何かわからない鳥の声を聞いたら、その場所で(あるいは家に帰って)システムにつなぎます。GPS情報や地図から鳥の声を聞いた場所を入力し、その場所の位置情報や時期、ユーザーが入力する環境や鳴き声のパターン(単音、2~3音のくり返し、複雑な声など)、声の高さなどの情報をもとに、候補となる鳥をリストアップしてくれるようなシステムです。そして、リストアップされた鳥の声と聞き比べて、その人自身で識別してもらいます。

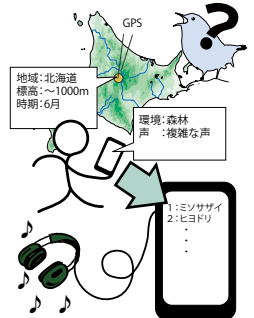


図. 検索システムのイメージ。端末の位置情報などから可能性の高い鳥を抽出する。

そばに鳥のことがわかる人がいたら、その人と一緒に鳥を見聞きするのが一番ですが、そういう人がいない時には、なかなかよいツールだと思いません？

これが使い物になるかどうかは、検索結果を妥当なものにできるかどうかで決まります。そしてそれを規定するのは検索システムに搭載する鳥のデータベースの良し悪しです。地域によって、環境によって鳥の生息状況は違いますので、地域ごと、環境ごとのデータベースを整備する必要があります。その作業をお手伝いいただける方はいらっしやらないでしょうか？それ以外にも鳥の方言のチェック、写真の提供などにもご協力が必要です。ご協力いただける方は、植田(mj-ueta@bird-research.jp)までご連絡ください。みんなで鳴き声検索システムを作り上げましょう。

活動報告

カワウ生息状況調査マニュアル公開！

各地でカワウによる被害問題が注目され始めて、かれこれ15年ほどになります。この間、カワウの保護管理を目指して府県の協議会や複数の都府県を含む広域協議会が作られてきました。これらの地域では、カワウの生息状況の変化もだいぶ把握されるようになってきました。しかし、まだ、現状把握や対策の効果の評価が立ち遅れている地域もあります。このような地域で、新たにカワウの調査を始めようとする方々の参考になるのではないかと考え、調査のマニュアルを作成しました。研究や被害



対策に、このマニュアルがお役に立てば幸いです。

今回のマニュアルでは、ねぐらやコロニーで行う調査について紹介しています。個体数をより正確に数えるためのノウハウや、繁殖ステージの進み具合の記録方法、成鳥と若鳥の比率の調査方法など、バードリサーチで行なっているカワウのねぐら・コロニー調査の全てを解説しています。ご希望の方は、下記のバードリサーチのホームページより、ダウンロードしてください。【加藤ななえ】

■カワウ生息状況調査マニュアルのページ

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kawau/countmanuala.html

※ どのような方がどのような目的でダウンロードされるのかを調べるため、簡単なアンケートをお願いしています。ご協力をよろしくお願ひします。

活動報告

ガンカモ調査について 韓国で情報交換会をしました！

神山和夫

日本では毎年1月にガンカモ類の一斉調査があり、ガン類やハクチョウ類についても各渡来地で調査が行われていますが、お隣の韓国でもよく似た調査が行われているのをご存じでしょうか？日本や韓国に渡ってくるガンカモ類の中にはロシアの繁殖地が同一の個体群もあると考えられています。このため、両国の調査結果を共有できれば、個体群全体のモニタリング態勢を構築することが可能になります。今回、韓国のNIER(National Institute for Environmental Research)のキム・ジンハン教授のご協力で、韓国でガンカモ類の調査をしている方達との情報交換会を開いてもらうことができましたので、ご報告します。

情報交換でえられるもの

日本からは雁を保護する会の呉地正行さん、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の嶋田哲郎さん、そしてバードリサーチの神山が参加しました。NIERは日本で言えば国立環境研究所のようなところですが、毎年1月に水鳥(ガンカモやサギ、シギチ、カモメなど)の一斉調査を韓国全土で実施しています。この調査では全土に192か所の調査地を配して、各調査地は河川全体などの大きな単位なので、全土の主要な水鳥生息地をほぼ網羅できているようです。最も数の多い種はトモエガモで、2011年1月には約43万羽が確認されたそうです。NGOが実施している調査では、Waterbird Network in Koreaのハクチョウ調査の発表がありました。この調査では約80



写真. 日本のマガン調査についてプレゼンする嶋田哲郎さん。

か所の調査地で11~3月まで毎月カウントを行っており、地点ごとの季節変化が正確に把握されています。そして日本から見ると対馬の対岸にあるNakdong川河口がハクチョウ類の最大の越冬地になっているということです。韓国ではオオハクチョウの数が圧倒的に多く、2010/11年の最大値は1月の4668羽でした。一方、コハクチョウの数は最大でも133羽しかおらず、しかもその数は11月が最大で、冬に向かって減少していくということです。そのため、コハクチョウの一部は日本の中海、宍道湖に渡って越冬している可能性も考えられます。

今後どのような協力関係を作っていくのかについては、さらに話し合いが必要ですが、今回の情報交換で両国の関係者がデータ共有や協同調査をしていく必要性についての共通理解が得られたのではないかと思います。図1と図2で示したような日本と韓国での個体数の変動の比較からわかってくることもあると思います。

ところで、今回の韓国訪問で印象的だったのは、あちらには日本語を話す研究者が多いということです。十数名の会議参加者のなかだけでも、三人の方が日本語を話されました。NIERでは他にも日本語を話す研究者に出会ったので、私たちの方がぜんぜん韓国語が分からないのが申し訳なく思えてきて、帰国後、韓国語の勉強を始めています。次に行くときは、ちょっとはマシな会話ができるように努力しようと思っています。

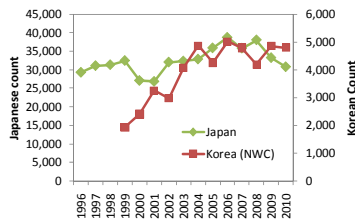


図1. 日韓の1月調査によるオオハクチョウの個体数。

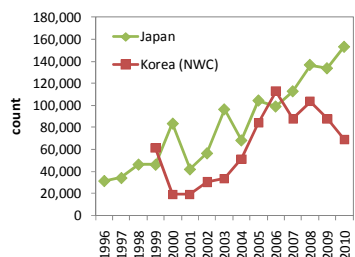


図2. 日韓の1月調査によるマガンの個体数。

研究誌 Bird Research よい

● 今月の新着論文

ヒクイナの生息状況についての論文が掲載されたのでご紹介します。

渡辺美郎・平野敏明. 2011.
神戸市西区周辺におけるヒクイナの生息状況.
Bird Research 7: A45-A55.

バードリサーチでは2006年からヒクイナの生息状況のアンケート調査を行ってきました。その結果、各地で減少傾向にあることがわかったヒクイナですが、西日本にはまだ高密度で生息する場所があることがわかってきました。そのような高密度で生息する場所の1つ、神戸市西区周辺で、生息環境の調査をしたのがこの論文です。

著者らは、ヒクイナの鳴き声を再生して、それに反応するヒクイナの数をかぞえるという調査方法で、約43.8km²の調査地に越冬期には少なくとも76羽、繁殖期には81羽のヒクイナが生息していることを確認し、その環境を調べました。すると確認地点のほとんどは湿地性植物が生えている場所だったという結果です。調査地には溜池が多くあり、1年を通して湿地性植物の生える水辺が広く存在することが、ここにヒクイナの多い理由の1つだと著者らは、指摘しています。【植田睦之】



写真. 調査地で撮影されたヒクイナ。

論文紹介

気候と地形だけじゃない！
土地利用が広域的な生物多様性を決定する

種数の広域分布とその決定要因

地球上の生物種の四分之三が熱帯地域にいます。これがなぜなのかは、歴史的に大きな関心を集め、温度が高く降水量が多いため利用可能なエネルギーが大きいことや、多くの生物の祖先が熱帯起源であることなどが仮説として示されています。近年、鳥類の種数は熱帯地域の特に起伏の大きな地域で高いことが明らかになり、広域的な生物多様性の分布の決定要因としては、気候と地形が有力だとされています。一方、人間による土地利用の影響は狭い範囲(数十m~数km四方)で鳥類の分布に影響を与えていることが明らかにされています(図1)。しかし地球上のほとんどの陸地は人類によって改変されています。このような状況下では、広域的な生物多様性の分布にも土地利用は大きな役割を果たしているのではないかとというのが私の問題意識です。実際、2009年12月号でご紹介したように、全国を網羅した環境省の自然環境保全基礎調査の1970年代と1990年代のデータを比較したところ、森林性鳥類の分布は土地利用によって大きな影響を受けていました。そこで今回は、森林性鳥類の種数の日本全国規模での分布に、気候(気温、降水量)と地形(標高)に加えて、土地利用(天然林面積、人工林面積)が果たす役割を明らかにすることにしました。個人で日本全国の鳥類調査を行なうことは難しいので、自然環境保全基礎調査のデータは非常に貴重です。今回もこのデータの1990年代の調査結果を用いました。

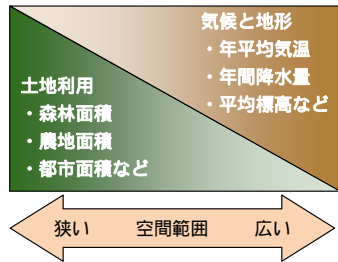


図1. 生物多様性の分布決定要因の従来の扱われ方。土地利用は狭い範囲、気候と地形は広い範囲でその影響が目立ってきた。

広域分布に対する土地利用の役割とは？

まず、日本全国を複数の空間解像度(5km, 10km, 20km, 40km, 80km四方)で区切りました。次に、各区画の森林性鳥類の種数を求め、気候や標高、土地利用との関係を解析しました。その結果、森林性鳥類の種数は、細かい解像度よりも、40km四方と80km四方という粗い解像度の場合に、気候と地形、土地利用によってよく説明されました(図2)。そして森林性鳥類の種数は、40km四方に天然林が占める割合が660km²(40%)を切ると減少し始めることがわかりました(図3c)。一般的には気温が高く低標高の地域には生

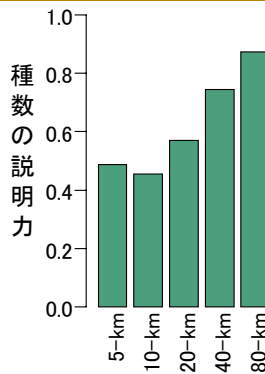


図2. 異なる解像度における気候と標高、土地利用による種数の説明力を示す。Reprinted from Oikos, Vol 120/3, Yamaura et al., 427-451, Copyright (2011), with permission from John Wiley and Sons.

物の種数が多いのですが、日本のそのような土地の天然林は農地や都市などへ転換されていました(図3a,b)。解析の結果、日本では年間平均気温が高く(8℃を超える区画)、標高の低い地域(平均標高が270m以下の区画)で、森林性鳥類の種数は減少していました(図3d,e)。

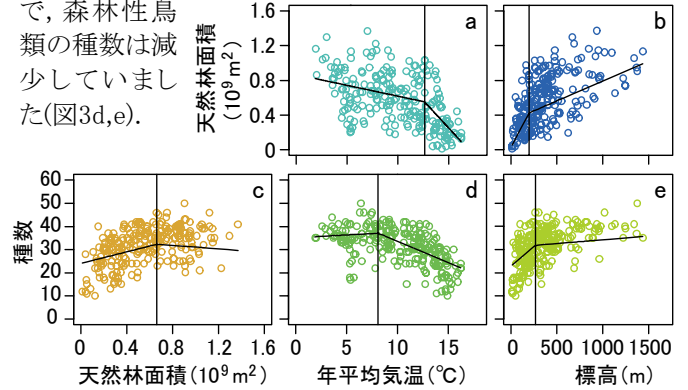


図3. 40km四方で区切った場合の2つの変数の関係。カラーのポイントはデータ、垂線は折れ線回帰によって推定された閾値を示す。データポイントを通る実線は折れ線回帰の推定ライン。種数の推定ラインがポイントと多少ずれるのは、他の変数(調査努力量)の影響による。Reprinted from Oikos, Vol 120/3, Yamaura et al., 427-451, Copyright (2011), with permission from John Wiley and Sons.

結果が示すこと

種数に代表される生物多様性の広域分布は、従来気候と地形で決定されていると考えられてきました。今回、気候と地形は人類による土地利用様式を大きく規定して間接的に広域的な生物多様性の分布を決定していることが明らかになりました。土地利用は、気候と地形の本来の影響をゆがめているという点から、生物多様性の広域分布の決定要因として大きな役割を果たしていると考えられます(図4)。

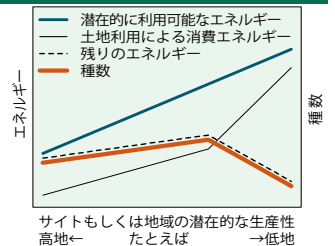


図4. 地域の潜在的な生産性と土地利用、生物の種数の関係の概念図。潜在的に生産的な地域では土地が人間に利用(森林が伐開)され、生物が利用可能な残りのエネルギーはかえって少なくなる。エネルギーと種数の間に線形の関係があると仮定すると、種数は中程度に生産的な地域で最大化するだろう。Reprinted from Oikos, Vol 120/3, Yamaura et al., 427-451, Copyright (2011), with permission from John Wiley and Sons.

この結果は、温暖な低地は長く人間に占有され、森林が単純化、切り開かれて、豊かな生物多様性がすでに大きく消失してしまっていることを示します。広域的な生物多様性は、森林の利用の歴史が短く、広く森林が残存する冷涼な高地で維持されているといえるかもしれません。現在、温暖化をはじめとした気候の変化が生物多様性に及ぼす影響が目を集めています。気候の変化は土地利用の変化を介して、生物多様性に影響を及ぼすかもしれません。また40km四方を天然林が占める割合が40%を切ると種数が減少を始めたように、森林の減少の影響には閾値があることも示されました。このような閾値に一般性があれば、応用上大きな意味があるでしょう。【山浦悠一 北海道大学】

Yamaura Y., Amano T., Kusumoto Y., Nagata H. & Okabe K. 2011. Climate and topography drives macroscale biodiversity through land-use change in a human-dominated world. Oikos 120:427-451.

イソヒヨドリ 英: Blue Rock Thrush 学: *Monticola solitarius*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ツグミ科

全長	♂ 224.7mm (215-232)	♀ 221.4mm (212-227)
自然翼長	♂ 120.6mm (115-130)	♀ 117.1mm (111-121)
露出嘴峰長	♂ 21.4mm (19-25)	♀ 20.8mm (21-22)
尾長	♂ 80.5mm (75-86)	♀ 77.0mm (74-83)
ふ蹠長	♂ 30.6mm (29-34)	♀ 30.5mm (29-32)
体重	♂ 62.0g (57-69)	♀ 57.3g (47-63)

* 2010年から2011年に琉球大学構内(沖縄県)で捕獲したオス13個体, メス7個体の計測値に基づく。

羽色:

オスは頭部から背, 上尾筒にかけて明るい青色で, 胸から下尾筒にかけての下面と下雨覆いは赤褐色。翼と尾は黒褐色である。メスは上面が灰黒褐色で, 顔から胸, 腹, 下尾筒にかけての体下面が黄色みを帯びた褐色で, 黒褐色の横斑または鱗状斑がある。

鳴き声:

繁殖期のオスは「ホイピリーチョ」「ヒーチョイピー」などと美しい声でさえずる。同じ個体のさえずりでも複雑なパターンがあり, 個体によって異なるさえずりのレパートリーを持っている。繁殖期に外敵が巣に近づいたときには, 頭と尾を交互に上下させながら「ヒイヒイヒイ, グェグェグェ」という警戒声を発する。沖縄島では7~9月の冬期にむけてのなわばりの防衛期にもさえずりの回数が増加する。

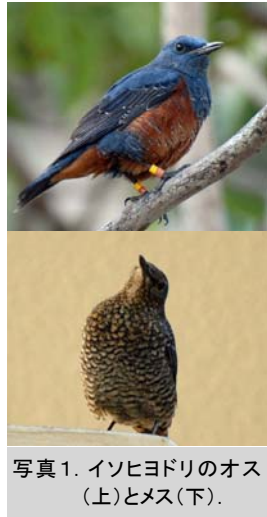


写真1. イソヒヨドリのオス(上)とメス(下)。

2. 分布と生息環境

分布:

アフリカ北部および地中海沿岸のヨーロッパ諸国からヒマラヤ, 中国, ベトナム, ロシア, 日本, マレー半島, スマトラに繁殖分布する(日本鳥類目録編集委員会 2000, Dickinson 2003)。日本で繁殖する亜種 *M. s. philippensis* は, 満洲, ウスリーランド, 韓国, 日本, 中国東部, 台湾で繁殖し, 渡り性の個体は中国南東部から東南アジアで越冬する。日本では北海道などの北日本では夏鳥, 温暖な地域では留鳥である。

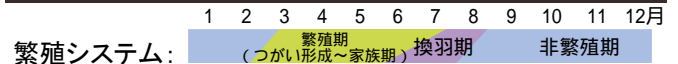
生息環境:

イソヒヨドリの学名は「山に生息する(*Monticola*) 単独性の(*solitaries*) 鳥」を意味し, 分布地の大部分では本種は高山帯の岩場に生息している。一方, 日本では, 和名が示すとおり, 主に海岸の岩場(磯)に生息し, 繁殖している。

最近では海岸だけでなく内陸部での繁殖例が増えており, 海岸線から内陸部へと繁殖分布を拡大させている可能性がある。沖縄島では海岸から約2.5km離れた琉球大学構内で1982年には既に多くのイソヒヨドリが繁殖していた。近畿地方では, おそらく1990年代以降になって内陸部での繁殖例が増えている(和田岳氏私信)。インターネットの情報などによると2000年代には内陸部でイソヒヨ

ドリが繁殖期に観察された例が全国各地で報告されていることから, 内陸部への繁殖分布の拡大は徐々に北上しているのかもしれない。

3. 生活史



繁殖システム:

一夫一妻制(まれに一夫二妻の場合もある)で年1~2回繁殖する。メスのみが抱卵を行う。ヒナへの給餌はオスとメスが共に行う。巣立ち後のヒナをオスとメスの親鳥が分担して育てる「ヒナ分け」と呼ばれる行動がみられる。

巣:

枯れ枝や枯草を敷き詰めた椀型の上部開放巣を作る。海岸の岩場では崖の岩の上や岩の隙間, 岩場の灌木の中にする。巣の大きさは外径22×21cm, 厚さ約10cm, 内径(産座)約10×10cm, 深さ約4cmである(柿澤・小海途 1999)。琉球大学構内では, 建物のひさし部分, 雨樋のすき間, コンクリートの角穴, 機械の隙間, 換気口の中, シーサー(建物に備え付けられる獅子の像)の口の中などに営巣している。半数以上のペアが古巣を利用する。



写真2. 琉球大学構内. 複雑な凹凸のあるビルと樹木の豊富な大学構内はイソヒヨドリの格好の繁殖場となる。

卵:

一腹卵数は平均4.9(3-6)卵。卵は淡緑青色無斑で, 長径21~29mm, 短径18~20mm。

抱卵, 育雛期間, 巣立ち率:

沖縄島では3月中旬から産卵を開始する。抱卵開始から孵化までは約15日間で, 育雛期間は15~18日間である。巣立ち率(巣立ちヒナ数/卵数)は82.7%(n=162)。巣立ち後17~25日間は親のなわばり内で給餌を受ける(家族期)。巣立ち後はネコに襲われたり, 落下したり, 車に轢かれたりと様々な要因で死亡し, 巣立ち後20日までのヒナの死亡率は40~60%であった。



写真3. 巣の中のヒナ。

4. 食性と採食行動

海岸で生息するイソヒヨドリはフナムシやカニ類を採餌する(与那城1986)。琉球大学構内では, 巣内ヒナに親が運ぶ餌の種類は, 鱗翅目幼虫, ゴキブリ類が多く, 甲虫目, コオロギやバッタなどの直翅目, ミズミ類, ムカデ, ヤモリ, アオカナヘビ, カエル, クワやガジュマルの実などである。成鳥の食性もほぼ同様であるが, ヘビやネズミの仔なども捕食する。巣立ち後のヒナに親がジャコウネズミを与えた記録もある。餌動物を捕獲すると嘴でくわえてたたきついたり, つついたりして殺してから摂食もしくはヒナへ給餌する。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 多様な親子関係

インヒヨドリは親は巣の中にヒナがいる間はオスメス両方でヒナの世話をします。その際には巣内にいるすべてのヒナを区別せずに餌を与えている。巣内の糞の処理もオスメス両方で行う。しかし、ヒナが巣立ってからは給餌行動が変化する。この時期、オスによる専属給餌(オスだけがヒナに餌をやる)、メスによる専属給餌(メスだけがヒナに餌をやる)、ヒナ分け(ヒナによってオスによる専属給餌を受ける個体とメスによる専属給餌を受ける個体が異なる)の3つの給餌行動がみられる。1994~1996年に集中して観察した15ペアではこの3つの行動が5ペアずつで見られた。ただし、2回繁殖したペアについては1回目の繁殖と2回目の繁殖では行動が異なった。中でもヒナ分けは特殊な親子関係である。ヒナ分けを行っているペアでは、自分が世話をしていないヒナから餌ねだり行動を受けた親は高い割合(80%以上)でヒナを威嚇する。また、ヒナも自分の担当の親に餌をねだることが多い。担当でない親も親であるはずなのであるが、よそのヒナに接するような行動になる。

ヒナ分けなどの行動をみると、それぞれの親とそれぞれのヒナの間ではかなり確固たる認識がされているように感じる。しかし、一方で、3年間の調査期間中に5組のペア間で7個体のヒナの「養子縁組」も観察された。主に隣り合うペアで片方のヒナがもう一方のペアの行動圏に入り込み、そのままそのペアの子になってしまった。これは巣立ち後5日以内に起こっており、それ以降には巣立ちヒナがよその行動圏に入り込むと威嚇される。この時に養子となったヒナは1個体を除いてすべて成長し、分散に至った。

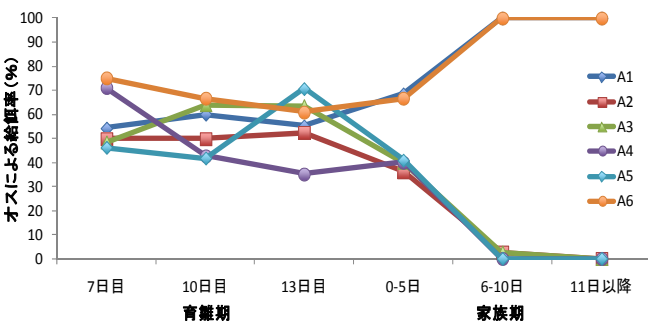


図1. ヒナ分けの例。6羽のヒナ(A1~A6)がオスから受けた給餌の割合(オス親による給餌回数/全給餌回数)の変化を示す。

● 周年維持されるオスのなわばり

オスは周年なわばりを維持する。なわばりの維持は、さえざり(テリトリーコール)、実際の追い掛け、追い出し行動によってなされる。換羽時だけは目立たないが、その他の時期は常にオスはなわばりの中の高い位置にとまり、見張りをしている。大学構内では高いビルや街灯の上などが格好の見張り場となっている。同時にビルに付属する様々な構造は前述のように営巣場所としても適している。建物での営巣は、雨があたらず、乾燥しているなど構造的な利点の他に、人間が常に行き来しているためヘビや猛禽等の

天敵が近づきにくい効果もあると考えられる。よい営巣場所の確保は次の春のメスの確保に結びつくことから、大学構内のインヒヨドリは建物を中心としてなわばりを形成しており、密度が高くなると、建物の東西南北の壁ごとに1個体ずつのオスがなわばりを持っているという状況も起こる。

● 美しい鳴き声

インヒヨドリの特徴の1つは高い周波数の美しい鳴き声である。周波数帯も広く、また、バリエーションも多い。Songは音の異なる複数のnoteによって構成されるが、周波数が複雑に変化するnoteや音の強弱が短い単位で繰り返されるnoteなどを数多く含む。短いsongと長いsongでは使われる場面や機能が異なる。長いsongは他個体に対する直接的ななわばり防衛や求愛など実際に個体間のコンタクトの場面で使われ、短いsongは対象を特定せずに発するなわばりの宣言等につかわれる。これらのsongタイプの使い分けはメスによるオスの選択の際にも機能していると考えられ、オスの繁殖成功にも関わっている。

6. 引用・参考文献

Dickinson EC (ed) 2003. The Howard and Moore Complete checklist of the birds of the world, revised and enlarged third edition. Princeton University Press, Princeton.
 柿澤亮三・小海途銀次郎. 1999. 日本の野鳥 巣と卵の図鑑. 世界文化社, 東京.
 日本鳥類目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
 与那城義春. 1986. 沖縄の野鳥観察. 新星図書出版.

執筆者

伊澤 雅子 琉球大学理学部海洋自然科学科
 松井 晋 立教大学ポスドク研究員

1991年に琉球大学に赴任して来た時に、出身地の福岡では海岸でしか見る事のできなかったインヒヨドリが学内のあちこちで繁殖しており、かつ人を恐れずに近づいて来ることに驚きました。鳥の好きな学生と一緒に調査をしてみると、その繁殖やなわばり行動など非常に面白い生態をいろいろ持っている鳥であることがわかり、ますます興味が湧きました。本来は哺乳類が専門でイリオモテヤマネコなどの生態研究をしています。【伊澤】

2001年に琉球大学理学部の生態学研究室に所属し、卒業研究として琉球大学構内でインヒヨドリのなわばりサイズに関する調査を行いました。2002~2009年まで大阪市立大学大学院理学研究科の動物機能生態学研究室に所属し、沖縄県南大東島でモズの生態調査を行い、2010年から立教大学理学部でポスドク研究員として都市で繁殖するスズメの生態を調べています。【松井】



伊澤(前列右)と松井(後列左)。

活動報告

鳥学講座アンケート 結果その3 ～どこで開催なら参加しやすい？～

高木憲太郎

バードリサーチ鳥学講座についてのアンケート結果のご報告第3弾は、開催場所についてです。北海道から沖縄までを10の地方に分類して、どこでの開催なら参加できるか聞いてみました。一番希望が多かったのは関東でダントツでしたが、東北から近畿にかけてならば、30人ぐらひは集まってもらえそうです(図1)。お住まいの地域との関係調べてみたところ、圏外からの参加希望が多かったのは、交通の便が良い関東がやはり1番でしたが、それに次ぐ2番目は近畿ではなく東海で、関東からだけではなく、北信越からも参加できることが理由のようです。

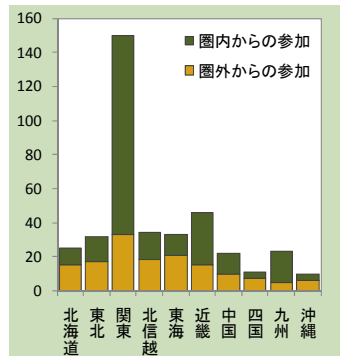


図1. どこでの開催なら受講するか聞いたアンケートの結果(3つまで選択可)。回答者の住まいが開催地域の圏内か圏外かで色分けした。

いっそ、旅行がてら北海道や沖縄へ、というニーズもあるかなあと考えていましたが、それほどではないようです。仕事を持っていて週末に参加するという人

が多く、移動に時間がかかるころだと参加しにくい、ということなのかもしれません。Ustream中継では、山中湖の研究集会で40名、ツバメの研究例会で50名ほどの方に視聴してもらえました。遠くて参加できないという方のために鳥学講座も配信を検討したいと思います。

ところで、第1回目の時に、講義の内容についてのアンケート結果をご報告しましたが、4位に野鳥の識別講座がランクインしていました。そこで、アンケートの際に質問した野鳥観察の経験について、集計してみました。アンケートに書いてもらったコメントや私の知っているお名前から察するに、謙遜していらっしゃる方も多いようですが・・・100種まではわからないという方が3割ほどいました(図2)。アンケートでは探鳥会への参加についても聞いていますが、識別に自信がない人の多くは、普段探鳥会に参加していない人が多いようです。識別講座は、参加者全員に満足してもらおうのが(人によって簡単すぎたり、難しすぎたりして)難しいところなので、鳴き声検索システムの開発などを進めています。野外で一緒に見聞きするのは覚える近道、鳥学講座でも識別編を考えたいと思います。

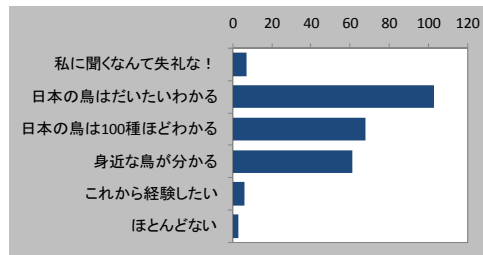


図2. アンケート回答者の野鳥観察の経験。数字は回答人数。

お知らせ

バードリサーチ総会を開きました!

8月21日の午後、府中市の府中グリーンプラザ会議室で、バードリサーチの総会を開きました。

総会は昨年度の事業報告や会計報告、今年度の事業計画を運営委員の方々に説明し、これからの運営について、ご意見をうかがいます。毎年真夏の8月に開催しているので、例年うだるような暑さの中、汗を拭きながら、ということが多いのですが、今年は驚くほど涼しく助かりました。

昨年度は生態図鑑の販売を開始したこともあり今後の出版戦略や、Ustreamによる集会の生放送や秩父ライブなどインターネットの活用、企業との連携、今年度のプロジェクトの提案など、今後の話題で特に議論が盛り上がり、予定

していた時間だけでは足りなくなっていました。新年度のプロジェクト案のうちいくつかは、今年度、実現したいと思っています。どんなプロジェクトかという・・・ひとつは鳴き声検索システム、ほかはまだ、もうしばらく秘密にさせてください。形になった時には、一番最初に皆さんにご報告いたします。



今後も、参加して楽しいと思ってもらえて、かつ、社会に役立つ企画を考え、実行していきたいと思っています。ご協力、よろしくお願いいたします。【高木憲太郎】

バードリサーチニュース 2011年8月号 Vol.8 No.8

2011年8月25日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎

表紙の写真: カワウ